

【コメント】

水内 俊雄

わたしにとっては、1985年に戦前の大連の都市計画と都市形成を扱って以来の、久方ぶりに触れたテーマであった。その点、最新研究動向に触れていないことをご容赦いただき、コメントさせていただきたい。ご専門の文学における当時の中国都市の表象のされ方を分析されているプロセスの中で、この研究が生み出されてきたとすれば、文学のご研究とは離れて、非常に都市計画的なスタンスからのご発表であったように思われる。とにかく、大連のフィジカルな形態や配置について、きっちりと説明され、わたしの大連研究当時の記憶をまざまざと呼び覚ませせてくれる詳細な資料提示であった。中でも、「ロシア帝国租借地としてのダリーニー」と、「帝国日本に受け継がれたモダン都市・大連」の対比は、わたしの頭の中ではわかっている、あらためて、異なる建造環境が景観化されたことの認識を強くした。

この異なる景観化についての第一のコメントは、現在の大連における都市建造環境の観光化は、ロシア風情街、日本人風情街という形で、急激に進み始めた点に絡めてみたい。これら二つは、いずれもロシアのダリーニー時代に実現、あるいは企画化されたのであり、文化権力のshowであるという観点からも、現在評価されているヨーロッパ建造環境文化の真正性authenticityは、ロシアの手によって実現された建造環境であったことである。建物、デザイン、空地、広場、宗教、公園といった要素がロシア人の手による、それがヨーロッパの模倣であったとしても、その後日本人が作り出した大連の景観よりも、後日の中国人による観光化対象として、ヨーロッパの真正性足るにふさわしいものであったといえる。この真正性の所在に関するわたしの意見に対して、劉先生のご意見をお聞かせいただきたい。

第二点目は、では日本の作り出した景観の評価についてであるが、まちなみが、景観が、権力や威光を発揮するという点では、都市計画にもとづく均質な、計画的な、規範的な普遍性をもとに設計され、それが権力を想起させるという回路を有していたのではなかろうか。これはヨーロッパ文化の真正性とはまた異なる、関東州庁付近のプランに代表されるような、画一的な建造環境が提供されたことに注目すべきではなかろうか。土地区画整理地区に代表されるような大連郊外に生まれた〇〇台と呼ばれる地区も、普遍的な都市計画が生み出した一般郊外住宅地のひとつであったのである。その他の鉄道附属地のプランの均質性も含めて、日本の作り出した景観を、このような都市計画を軸にして見るという観点に対し、劉先生は、このわたしの考え方をどう評価されるでしょうか。

確かに上海や天津、また瀋陽などにみられるような、一種の異文化ないしは異文明の衝突と融合のドラマがあったとすれば、大連は、青島やハルピンと同様、各帝国の一方向的な文化権力とその欲望のショーであるとの劉先生の対比は、大筋であたっていると思われる。ただわたしの地理学者的な見地からは、都市計画という普遍性でもって、旧満洲という地での新興都市の基盤が作り出されたという、もうひとつの筋書きも重視してみたいと思っている。その中で、当時の新京などの意味合いも理解されるのではなかろうか。しかしながらこの都市計画には大いなる権力性がこめられていることも、あわせて指摘しておきたい。場合によってはひとつの暴力、植民地支配の格好の道具にもなったからである。

もし可能であれば、こうした日本ナイズされた植民地都市で、ある程度縦横無尽に活動した、中国商人や経営者のこうした都市への記憶やイメージというものも、一度研究対象にしていけたら、より複合的・重層的な都市史像が構築されていくのではないかとの期待を述べさせていただいて、コメントとさせていただきたい。

(大阪市立大学大学院文学研究科)